

TAKEICHIRO HIRAI PERFORMS THREE MAJOR CELLO CONCERTI

演奏生活25周年記念 ——At the Silver Jubilee of his Concert Career——

平井丈一朗

—— 三大チェロ協奏曲の夕べ ——

管弦楽=東京フィルハーモニー交響楽団

Tokyo Philharmonic Orchestra

指揮=平井丈一朗

Takeichiro Hirai, conductor



'79年5月31日(木)

6:30pm

虎ノ門ホール

Toranomon Hall-Tokyo

ハイドン：チェロ協奏曲 ハ長調 (平井丈一朗の力
テンツァによる)

Haydn: Concerto in C major (Cadenzas by
Takeichiro Hirai)

サン・サーンス：チェロ協奏曲 イ短調 作品33

Saint-Saëns: Concerto in A minor Op.33

ドボルザーク：チェロ協奏曲 ロ短調 作品104

Dvořák: Concerto in B minor Op.104

都内プレイガイド前売中

指定席/¥4,000 自由席/¥3,000

平井丈一朗について

巨匠カザルスの高弟であり、かつ、その後継者としてわが国が世界に誇るチェリストである。

幼少より非凡な楽才を示し、小学6年生までにピアノ協奏曲ほか約100曲を作曲。その頃すでにピアノで演奏会、放送にしばしば出演した。12才よりチェロを斎藤秀雄氏に師事。第23回音楽コンクール第一位特賞。第1回文化放送音楽賞特賞受賞。桐朋学園卒。

1957年名チェリスト、ピアティゴルスキーの推薦により巨匠カザルスの門に入り、同年第1回カザルス国際コンクールで特別賞受賞。以来約5年間研鑽を積み、師とともに欧米各地を楽旅した。

1961年4月巨匠カザルスは愛弟子の晴れの帰国デビューを飾るため特に来日し、平井は恩師の指揮により、東京と京都でドボルザークなど四大協奏曲を演奏。皇太子御夫妻の御来臨を得て楽壇最大の話題となった。

来日に先立ち、ニューヨークで記者会見を行ったカザルスは「平井丈一朗は明日の音楽界に大きな希望をもたらす存在です。私は、あふれんばかりの才能をもった彼の輝やかなし前途を確信します。平井こそは私の後継者となるでしょう」と語っている。

TAKEICHIRO HIRAI



1962年第2回チャイコフスキー国際コンクールに日本代表として参加。名譽あるソ連作曲家同盟特別賞を受け、ソ連各地を楽旅、いづれも圧倒的な称賛をからえた。

1964年毎日新聞社主催で3夜に渉りバッハのチェロ全作品(9曲)を初演奏し、チェロ演奏史上に輝やかなし金字塔を打ち建てた。

その後、世界的に幅広く活躍を続け、欧米各国の主要都市で、協奏曲、リサイタル、放送等を行い、至る所で大成功を収めている。

また、フレンニコフの協奏曲及び今回の曲目中にある自作のカデンツァによるハイドンの協奏曲ハ長調の日本初演、ベートーヴェンチェロ全作品の監修出版並びに連続演奏会(1977)を行うなど、特筆すべき業績をあげている。

1973年以来、アメリカ楽旅の折には演奏会、放送のほか、有名大学でマスタークラスの指導と講演を行っている。また、恩師カザルスの死去に際しては、米国及び日本で追悼演奏会を行い、全聴衆に深い感動を与えた。

1976年ニューヨークの国連シンフォニー協会の要請によりレナード・バーンスタイン、クラウディオ・アラウ、ラヴィ・シャンカール、ヘンリック・シェリングらと共に同協会国際顧問となり現在に至っている。

外紙の批評より

☆ベルビニヤン・ランデパンダン紙(フランス)

平井丈一朗は完全な芸術家である。

☆フィガロ紙(パリ)

〈平井丈一朗——音楽の予言者〉

彼は疑いもなく世界屈指のチェリストである。

☆南ドイツ新聞(ミュンヘン)

平井丈一朗氏は巨匠カザルスの後継者たるにふさわしい堂々たる音と卓越したテクニックをもって、作品の一つ一つに本来の作曲者の精神を伝える名演を行った。(音楽評論家カール・シューマン)

☆タス通信(ソ連)

平井はリトワニア・フィルとドボルザークの協奏曲を演奏して聴衆に大きな感動を与えた。……彼は作曲家の魂を最大限に忠実に伝える音楽家だ。

☆ワシントン・ナショナル・ギャラリー交響楽団常任指揮者リチャード・ベイルズ評

平井氏自身の作になる見事なカデンツァによるハイドンの協奏曲ハ長調の偉大なる演奏は私の言葉に余る大きな感動をオーケストラ全員に与えた。我々一同は平井氏をソリストに迎えたことにより真の大芸術家と協演した時だけに感じられたあの満足感を味わっている。